

最前線からのメッセージ



羽曳野市医師会
会長 調子 和則

3回目の緊急事態宣言が発出された後、新規コロナウイルス感染者は減少し、4月の危機的な状態からは抜け出したように思われますが、宣言解除後も次の流行への対策を怠ることはできません。しかし、社会生活の抑制の長期化により、身体だけでなく精神へのストレスから体調を悪化させる人も多くなっています。これ以上の抑制策は、健康や経済活動から観ても限界があります。

新規感染者は若い年代に多いですが、重症者のほとんどは60歳以上です。無症候の感染者も比較的多く存在します。若い世代の活発な行動が感染症を拡大蔓延し、感染した高齢者が重症化するという状況です。

また、ウイルスには感染を繰り返すことで変異し、感染力や毒性を高める特性があります。ワクチンの効果には、「ウイルス感染を予防する効果」「感染しても発症を防ぐ効果」「重症化を防ぐ効果」に高い有効性があるとされています。

ワクチン接種により多くの人が抗体を持つことで社会全体が守られる『集団免疫の効果』を得ることができ、ワクチン接種が進めば、パンデミック以前に近い社会生活や経済活動に戻ることができます。

欧米からの副反応報告を考察すると、安全性・有効性が高いとされていますが、接種に不安な方はかかりつけ医や医師会に相談してください。

今後はより早く多くの市民の方がワクチン接種を受けることが重要になると思います。



運動器ケアしまだ病院
病院長 勝田 紘史

昨年から、新型コロナウイルス感染症の感染拡大で、私たちは今までに経験したことのない危機に直面しています。このウイルスは、愛する家族や恋人、友人に災いをもたらし、死を招く原因になるかもしれない。私たちはこの目に見えない敵と、最前線で対抗し、勝ち抜かねばならないと考えています。

私たち、運動器ケアしまだ病院は、運動器を中心に扱う病院ですが、第4波の医療崩壊危機に直面した頃、新型コロナウ

イルス感染症を直接治療することも経験してきました。医療従事者は、感染予防具を装着しても、感染してしまうかもしれないという不安や恐怖の中、最前線で戦っています。

そんな中、最大の防御ともいえるワクチンの接種が始まりました。特效薬がない現状では、一筋の光です。ワクチン接種が地域の方々に早期に行き渡り、集団免疫を獲得することが、この戦いに勝ち抜く唯一の方法だと思います。

当院は、病院の機能や性格上、新型コロナウイルス感染症を直接治療

する病院ではありませんが、このワクチン接種であれば我々にもできる。その思いで立ち上がりました。城山病院と意思を共有し、羽曳野市、四天王寺大学と協働して、はびきのコロセアムの集団接種の企画、運用に乗り出しました。64歳以下の一般接種も7月末から四天王寺大学の体育館をお借りして、6週間で約20,000回の接種を予定しています。

羽曳野市の地域連携で多くの方々にワクチン接種により免疫を獲得していただき、この長いトンネルから早く抜け出したいと強く思っています。



医療法人春秋会 城山病院
院長 石橋 孝嗣

城山病院は、これまで地域医療に微力ながら貢献してきたと考えています。今回の新型コロナウイルス感染症に対しても、貢献しなければと、昨年はPCR等の検査機器を導入し、診療検査医療機関に名乗りを上げました。年末には、軽症・中等症コロナ感染症患者の受け入れを2床で開始。今年の5月24日からは一病棟を改編し、11床へ増床しました。改編で、急性期医療を行う病床が240

床から208床に減床しましたが、在院日数を短縮することで、急性期医療が逼迫しないように、また、医療の質を落とさないように病院一丸となって取り組んでいます。

ワクチン接種に関しては、5月25日から羽曳野市、運動器ケアしまだ病院、四天王寺大学と協働し、はびきのコロセアムでの集団接種に参加しています。

7月2日までに羽曳野市の65歳以上の約34,000人の約51%にあたる17,250人の接種を行う予定で、当院職員も延べ約900人

を派遣します。また、集団接種終了後は、当院で16歳から64歳の方、約7,200人を対象にした個別接種も予定しています。

コロナ禍を災害と捉え、各施設や各部署で連携をとりながら、患者様のために最善をつくす、改善を重ねる、今できることを精一杯する、という医療者としての矜持を持って医療にあたっていきます。

今後も、急性期医療を逼迫させることなく、医療の質を落とすことなく、地域の皆様の期待に応えたいと思います。

羽曳野市の新型コロナウイルスワクチン接種は、65歳以上の集団接種・個別接種、16歳から64歳までのワクチン接種を順次進めています。今回は、本市のコロナワクチン接種に携わっていただいている病院、団体、大学、企業などを代表して、6人の方にコロナワクチン接種への意気込みや想い、市民の皆様に向けてのメッセージをいただきました。



医療法人医仁会 藤本病院
院長 前田 仁

医療法人医仁会 藤本病院は昭和50年に開設して以来、40年余りに渡り羽曳野市民、および近隣市町村の皆様とともに歩んでまいりました。

昨年より、猛威を振るう新型コロナウイルス感染症から地域住民の皆様を守り、当院の基本理念である人間愛・いたわりを大切にす「仁」の心を持ち、新型コロナウイルス感染症に立ち向かうため、プロジェクトチームを発足させました。

令和2年9月より地域外来検査センターを開設し、PCR検査を早期に開始し地域住民の皆様の診療にあたっております。

また令和3年4月から近隣医療機関の医療従事者へのワクチン接種ならびに、高齢者施設への巡回接種も行っております。

6月1日より65歳以上の高齢者の方を対象に1日最大200人の接種が可能な体制を整えております。

今後64歳以下の基礎疾患のある方、ならびに一般住民の方々に

も順次ワクチン接種を継続してまいります。

新型コロナウイルス感染症を一刻も早く収束させ地域住民の皆様が安心して、笑顔で暮らせるためにも一日も早く、できるだけ多くの皆様にワクチン接種を受けていただけるよう職員一丸となって頑張っております。

今後とも、どうぞよろしくようお願い申し上げます。



四天王寺大学 学長補佐
看護学部学部長 岡谷 恵子

四天王寺大学看護学部には、現在34人の看護師資格を持つ教員が在籍しています。

昨年より1年以上にも及ぶ新型コロナウイルス感染症の拡大で、大阪府内では医療崩壊が起り、感染しても医療が受けられないまま亡くなってしまいうという痛ましい状況を目の当たりにしました。

日々最前線で奮闘する看護者の皆さんの厳しい状況を見るたび、「同じ看護

者として何かできないか」という思いを多くの教員が持っていたと感じます。感染拡大を防止し、人々が日常を取り戻すためには、多くの人ができるだけ早くワクチン接種を終えることです。

そんな時に、しまだ病院を通じて羽曳野市のワクチン接種の協力依頼がありました。看護の現場から離れている我々教員でも看護師資格を生かして地域の人々の健康と生活を守ることに一役買えるのではないかと協力を決意しました。

また、大学では学生の臨地実習

を引き受けてくださっている地域の病院の協力を得て、看護学生へのワクチン接種を実施します。変異型コロナウイルスは若者に感染しやすいと言われております。学生へのワクチン接種は、感染拡大防止にも繋がり、ワクチン接種を受けた看護学生は、集団接種会場での有力なボランティアとして活動できます。大学が地域の発展や、人々の生活や健康を守るために、地域の団体・組織、人々と連携・協働していくことは、大学の使命の一つと考えています。



イズミヤ古市店
館長 山田 寛

私は、4月より羽曳野市のイズミヤ古市店に着任しました。最初の一步として『広報はびきの』用のラックを新設し玄関口での配布を始めました。早々にお客様から「近くで配ってくれて助かるわ、ありがとう、ずっと続けてや」とお褒め頂きました。

たびたび市役所をお訪ねし、徐々に羽曳野市との繋がりを感じ始めてきた頃、今回の新型コロナウイルスワクチン接種会場の話が飛び込んできました。

市ワクチン推進室の担当者の思いは直ぐに伝わり「これしかない！地元喜んでもらえる！」と直感しました。

直ちに本社と連携をとり会社を挙げての取組に繋がりました。会場化に向けては、色々な課題もありましたが、ワクチン推進室と同じ熱量、スピード感で走れた事、全員の『地元の方の役に立ちたい』一念が、施設利用をいただくことに繋がりました。

7月より当館が接種会場となったことに市民の方から「今回ええ

ことしたな」と言っていただき一同感激しております。「市民の方の健康を守る」お手伝いをできる事に喜びを感じます。集団接種会場に伺った際も医療機関のスタッフの方々と一体となった『チームはびきの』を肌で感じました。

「地元と繋がる」次の行動として地元の「農作・畜産物」と地元の方を結び繋げる場にしたいと考えております。皆様と『チームはびきの』の繋がりを目指し活動して行きたいと考えております。